『國民新報』1940年2月11日

[主張]　建國祭の朝

　二十一日紀。これは紀二千六百年のの日である。このはわが一のは一にとととでごすべきである。

　になもい。一々へなくても々はるに、はをされて、はにれて、にぶくののをる。るに々はなんとであらう。ゆるなのとして、へばつのとしての、をしてるのである。この、のおほまへにましくをち、宮にひつてしくを曲めて、のをげまつらう。きのにをけたことのにありがたく、なきかをしみじみじよう。

　にはない。あるものにするのみである。がえにえて日につたのは、一はすもし、々のがくをつたである。してのみがのするところではないのである。であるから、日ののをぶものは、にのと、のにをぐべきである。

　はである。がきにるゝがく、がにえるがくである。あるにとをけてをめたまふ。しながら、一そのをはんか、はそのとをひたまふのである。日はがにアジアをむるととをたまふた。それはわがのと、のによつてである。がはこのにをさねばならない。とびのにも、のをつてはならない。

　はにまします。十のにまします。一ののにまします。にははありない。をふのあるものはわれわれののみである。々にしてをへば、をしたてまつることはない。やはとふにをしてるのであるが、このがやかにするかかは一につて々の――のにあるのである。一つて、にふことにしてのみ一であるだけでなく、四のをしし、これにのをさせることに一でなくてはならぬ。一が、のなることにいてのく、にいてのく、にいてのく、にいてのく、にいてのきをてかからねばならぬ。

　このにり、々はをとして、とをげよう。